スペイン語俳文学の現状について

井　尻　香代子 *

要　旨

スペインやラテンアメリカでは，近年，俳句のみならず，連句，川柳，俳文，俳画など，俳文学の受容が進んでいる。本稿は，日本の俳文学がなぜスペイン語圏の一般の人々に広く実作されるに至ったのか，解明への端緒を開くことを目的としている。ここではスペイン語圏の俳文学ジャンルの実作状況を踏まえ, 日本とスペイン語圏の俳文学ジャンルの定義の比較分析を行った。その結果, 形式, テーマ，文体において共通点が見出された。スペイン語圏の人々は，その生活に根差した感性の表現を伝統的な口承文学に見出してきたが，現在はその新しい詩学を日本の俳諧の精神・美学に求めていると思われる。

キーワード：スペインやラテンアメリカ，俳句の受容，俳文学ジャンル，定義，スペイン語口承文学

俳文学または俳文芸とは，連歌に始まり俳諧・雑排・川柳から近現代俳句に及ぶ短詩型文学ないし合作文学の総称である。和歌と並んで日本人の美意識の根幹を形成し，世界文学の中にレンガ，レンク，ハイク，センリュウ，ハイブン，ハイガ等として，特異の地歩を占めてきた。本稿においては，スペイン語圏における俳文学の受容の現状について分析を進めたい。

1. スペイン語圏ハイク研究

スペイン語でハイクが書かれ始めてほぼ100年になる。スペインの詩人たち（フアン＝ラモン・ヒメネス，アントニオ・マチャド，フェデリコ・ガルシア＝ロルカ等）は1910年代から1920年代にかけてハイカイ風の短詩を書き，メキシコ詩人ホセ＝フアン・タブラダは1919年および1921年に2冊のハイカイ集を出版した[1]。その後，アルゼンチン，ペルー，コロンビアでもハイクが普及し，多くの作品集や研究書が出版された。

ロドリゲス＝イスキエルドの『日本の俳句』[2]，カベサスの『不滅の俳句』[3]，アウジョン・デ・アロの『スペインにおけるハイク』[4]などの研究書では，俳句のスペイン語圏での受容プロセスに加え，日本の伝統詩歌の歴史，季語，詩型，東洋思想（禅など）が論じられているが，なぜこれほどスペイン語圏でハイクが普及したのかを充分解明できたとはいえない。

* 京都産業大学文化学部

その理由の一つは，彼らが王朝文学に遡る貴族的な和歌の伝統や禅・老荘思想を重視するなど，ある種のオリエンタリズムから抜け出ていないからではないだろうか。周知のように，俳句は日本の伝統詩歌の最後に生まれたジャンルであり，和歌，連歌，俳諧連歌という流れが西欧文化と出会って生み出された。私たちは今，今日の俳文学の世界的隆盛の基盤を準備することとなった，芭蕉が俳諧に起こした改革についてもっと注目する必要があると思われる。

2. ハイクと俳諧

俳句は，正岡子規が西欧文化の個人主義と写実主義を受け入れ，俳諧の発句を独立させて生まれた。俳諧は，雅語のみしか使われなかった連歌に民衆の言語や精神を取り入れて誕生した。芭蕉は大衆化した俳諧を再び芸術へと昇華したが，雅語と俗語，伝統と新しみの相克から蕉風俳諧を創造した。

江戸時代末期から明治初期に日本文化に触れた外国人たちが出会った文芸ジャンルは俳諧（Haikai）であり，俳諧の精神・詩学を色濃く残していたものであるといえる。その後，ホトトギス派の俳句が普及し，R・H・ブライスの研究書によりハイク（Haiku）というジャンル名が広まっていく。

3. 近年のスペイン語圏俳文芸の興隆

日本の伝統詩歌はスペイン語圏で広く，長期にわたって受容され，『万葉集』『古今和歌集』『水無瀬百吟』『奥の細道』から，現代俳句，短歌，川柳まで幅広い詩的ジャンルがスペイン語に翻訳され読まれているが，とりわけ今日では，江戸期に発展した俳諧の連歌と，これより派生して現在まで広く作られてきた俳句，連句，川柳，俳諧紀行，俳文，俳画等の一連のジャンル全般（総称して「俳文学」）にまで関心が広がっている。

芭蕉の俳諧紀行『奥の細道』のスペイン語訳は他言語に先駆けて出版（1957 年）されて好評を博し[5], 2014 年までに 7 版を重ねている。また, ペルーの詩人シスネロス＝コスのハイブン集『入江』(2007 年）[6] はスペイン語圏の俳文学に影響を与え，以降，スペインやペルーの文芸誌でハイブン，ハイガ，レンクの特集が組まれるようになった。2014 年にアルゼンチンの 4 大学で開催された連句セミナーは 200 名を超える受講者を集めた[7]。2018 年からスペインで始まったハイブン・コンクールには，毎年スペイン語圏の 10 数か国より 50 を超える作品が寄せられ，受賞作品のアンソロジーが上梓されている[8]。

こうした流行の要因を探るヒントとなるのは，スペイン語ハイクの発展が主にスペイン語圏の小中学校等の教育機関，民間の文化センター，一般の社会人グループによって担われてきたという事実である。現在のスペイン語ハイクや「俳文芸」の実作者＝読者は，様々な職業で自らの生活を支えながらハイクの精神について考える民衆である。

このテーマについて掘り下げるため, まず日本における俳文学の各ジャンルの特色について確認し, 俳諧の精神について考えてみたい。その後，スペイン語圏の俳文学とは何かについて分析を行い，近年の発展の原因を探ることとする。

4. 日本の俳文学のジャンル

まず，各ジャンルを簡潔に定義する。主として『俳文学大辞典』[9] を参照し，日本における俳文学に関する共通認識を確認したい。

俳句：明治の俳句近代化以後今日に至る季語を含む五・七・五定型の文芸と一応定義できるが，無季定型のもの，自由律のものもこれに含めていう[10]。

連句：連句の名称は，江戸時代にも，発句と区別した意味でかなり広く用いられたが，当時は俳諧，正しくは俳諧之連歌の名で呼ばれるのが一般的であった。（中略）連句は五・七・五の一七音からなる長句（奇数句）と，七･七の一四音からなる短句（奇数句）とを，交互に何句か連ねていくもので，（中略）百韻や歌仙など様々な形式がある。連句の独自な特色は，連句はいわゆる座の文学であることである[11]。

川柳：季語・切字を要しない一七音の定型詩。世相・人事・人情を軽妙に詠むところに特色がある[12]。

俳文：俳諧的文章，俳意を含んだ散文詩的文章をいう。文章の題材･内容は，煙草･硯･枕･杓子･扇･月見など日常身辺に取材したものが主流で，時代が移るにつれて花火・郵便・写真といったように，その時々の新しい題材を取り上げる。これを俳諧自由の精神に基づき, 客観的に, また時にイローニッシュな目でとらえて, 叙述する。（中略）意識的に「俳文」の格を立てて創作したのは芭蕉が最初であった。（中略）『猿蓑』に載る「幻住庵記」がその代表作である[13]。

俳諧紀行：俳諧師・俳諧作者らによる紀行文。発句や連句を交えて記された。（中略）散文と韻文を併用して一つの文学的世界を結晶し，構築することを主な目的としており，（中略）俗語を交えて洗練工夫した文体を用い，軽妙で機知や笑いのこもる表現を目指している[14]。

俳画：第一義的には，俳諧の句を賛した草画である。さらにこれを押し広げれば，賛句の有無にかかわらず，俳諧的趣致つまり俳趣を表した草画ということになる[15]。

5. 俳諧の精神・詩学とは何か

広く知られるように，「俳諧」とは本来，滑稽を意味し，江戸期の庶民社会で育まれた「物事の滑稽な捉え方」を指していたが, 芭蕉はこの俳諧を芸術に昇華した。『去来抄』に伝えられる芭蕉の「発句は強く俳意確かに作すべし」との教えに関する挿話などから,「俳諧」とは，より普遍的には，新しい人生と世界の発見を目指した，反伝統的，反日常的視角による把握や発想と解すべきものとされる[16]。また，尾形仂は「俳趣」の特徴として，簡潔で暗示的であることの他に，貴族的優美に対する庶民的優美，正当性に反逆する機知的滑稽味，俗塵を超脱した飄逸味，豊満華麗に対する枯淡味などをあげている[17]。

6. スペイン語圏で実作されている俳文学ジャンル

次に，スペイン語圏で近年発展している俳文学のジャンルについて分析を行いたい。1980 年代か

ら 1990 年代にかけて先駆的な作品集や日本の俳文学作品の翻訳が出版され始め，2000 年以降は大西洋の両岸に位置するメキシコ，コロンビア，ペルー，アルゼンチン，スペインでハイク選集やハイク誌が多数出版され始めた。同時に，ハイクのみならず，他の俳文学ジャンルも開拓され始めた。当初は直接的，間接的に日本から渡ったものと思われるが，現在ではスペイン語詩のジャンルとして取り込まれ，実作されている。そうしたスペイン語俳文学の特色を作品集の序文，研究書，雑誌記事などから探ることとする。

ハイク：短詩型文学。現実を客観的に写生し，切れにより二分することによって内的比較・並置・取合せを生ずる[18]。

レンク：日本語では連歌は時代によって名称が変化してきた。しかしスペイン語では常に，5-7-5 の 3 行による 17 音句と 7-7 の 2 行による 14 音句が（タンカのように）複数の作者によって鎖のように連ねて書かれるものをいう。貴族の遊びとして始められ，有心連歌はより高尚なものを，無心連歌はより平俗なものを指した。やがて民衆的な滑稽味を有する形式が優勢となったが，芭蕉が弟子たちを導く修練として用い（俳諧の連歌），ついには 5-7-5 の発句を切り離して独立した作品とした（1 世紀後，子規は俳句と呼んだ）。芭蕉の一派が連歌に導入した形式を後に連句と呼ぶようになった（レンは連，レンガは連鎖する句であり，レンクは中国語で本来連なる句を意味するが，レンクは現在の連歌一般の名称である）。雅な連歌も連句もともに今日まで継承されて実作されているので区別すべきである[19]。

センリュウ：構造はハイクと同一（5-7-5 の 3 行に仕立てられた 17 音節）であるが，センリュウは一般的に季語（季節の言葉）を持たず，自然や季節を取り扱わない。一般にブラックユーモア，世俗的な不幸や環境についての直截な観察を含む人間の生活に焦点を合わせる[20]。

ハイブン：文学的表出，軽く美しい文書，しばしば自然などの環境との出会いの記録であり，文末に願望や問いが 1 句か 2 句のハイクとなっている。わずか 1 ページに詩的散文，個人の日記，自伝，紀行文学，短編小説，詩などが凝縮される様は驚きに値する[21]。

ハイカイ紀行：ハイブンに含まれる。

ハイガ：俳句が派生した俳諧の連歌の美学に基づいた日本の絵画で，一つの作品を通してハイクを描写する[22]。描かれたハイク[23]。

7. スペイン語圏俳文学の特色

上記の引用は最近の例のみであり，スペイン語圏の俳諧の詩学を調べるにはより多くの例を取り上げ比較する必要があるだろう。しかし，ここではスペイン語圏の俳文学ジャンルに共通する精神の概要を探るために第一歩を踏み出したい。今後は各ジャンルの定義について，他の文献や作品も参照しながら分析を進める。

ハイクの定義では，客観的な写生，切れ，取合せといった芭蕉の教えが中心となっている。身近で日常的な題材を用いて詩を生み出すレトリックが取り上げられている。ハイクの定義は，俳文学で最

初に受容されたジャンルであることから，研究者も実作者も様々に試みており，精神主義的なもの[24]や規範主義的なものも多い[25]。

レンクの定義では，貴族による連歌から庶民による俳諧の連歌（連句）への流れが明確に認識されており，その中で俗語の詩学を創造し，1 世紀後に俳句が誕生する基礎を整えた芭蕉の役割を押さえていることも注目しておきたい。

センリュウの場合は，人間の存在，ユーモア，俗世間の観察が重視されており，俳文学ジャンルの人間的側面を映し出す分野として説明されている。

ハイブンについては，1 ～ 2 句のハイクを末尾に置いた短い詩的散文であり，自然など周辺の事柄に取材した軽く芸術的なテーマを持つとされている。日本でもスペイン語圏諸国でも，俳文（ハイブン）は人々の生活の詩学を示す多くの文学形式を包括している。海外におけるハイブンの発展は，おそらく芭蕉の紀行文である『奥の細道』の翻訳出版の成功が鍵となっていると思われる。この作品の最初の外国語翻訳はスペイン語訳であったことを考慮すれば，スペイン語圏における俳文学普及に大きな影響を及ぼしたことは間違いないだろう。

ハイガは，俳諧味のある絵画とされているが，ハイガ作品を実見すると，常にハイク作品に添えて描かれており，墨絵，水墨画，水彩画，多様な種類のデッサンなど，スタイルは幅広いことがわかる。必ずしも添えられたハイクと関わりのない動植物，とりわけ鳥や花が描かれることが多い。しかし，日本の俳画と異なる現象として，抽象画も見られ，興味深い例となっている。

つまり，スペイン語俳文学には共通の基盤として，日本の文学的伝統と民衆の感性を結びつける芭蕉の詩学がみられる。前者からは詩形の基本と自然との共生を受け取り，後者からは日々の素朴な生活を重んじる人々の姿勢を受け継いでいるのである。

8. スペイン語詩と俳諧の親和性

それでは，本稿の中心テーマに戻ろう。スペイン語ハイク，センリュウ，ハイガ，ハイブン，レンクなどの俳文芸が現在広く実作されている原因は何だろうか。私は，日本の江戸期に民衆文学として発展した「俳諧の精神・詩学」は，スペイン語世界で形成されてきた詩学に通底するからであると考える。

スペイン語圏の社会には，即興性の高い定型詩が口承文芸として受け継がれてきた。スペインではロマンセ，セギディリャ，デシマなど，ラテンアメリカでは先住民の伝承歌謡と結びついたパジャーダ，コプラ，バグアラなどが歌われている。これらの民衆詩の歌詞は，自然現象，恋愛，家族，仕事，祭りなど，日々の生活についてユーモアや心情を込めて描写されたものである。スペイン語ハイクは一般の人々の生活の中に根付いたこのような詩的伝統があったからこそ，普及したのではないだろうか。日本では詩歌は中世まで貴族・武士・僧侶の社会で発展した。江戸期に至ると，商人や農民など一般の人々が自身の生活を題材にして俳諧の様々な形式を楽しむようになった。こうした状況は今日でも継続し，国内のあらゆる地域で多くの俳人たちが俳文学を実作している。

そして現在，市井に生きるスペイン語圏の詩人たちは自らの感性を表現することができる新しいジャンルを俳文学に求め，地球上の様々な土地で民衆の詩学を共有しつつ，日々の生活を詠い始めているのではないだろうか。それは現代を生きる人々にとって変わりゆく生活文化にふさわしい表現の模索であり，実践であると思われる。

注

1 Tablada, José Juan, Tres libros. Un día… (poemas sintéticos) Li-Po y otros poemas El jarro de flores (disociaciones líricas), Hiperión, 2000.
2 Rodríguez-Izquierdo, Fernando, El haiku japonés. Historia y traducción, Fundación Juan march, 1972.
3 Cabezas, Antonio (Selección, traducción y prólogo), Jaikus inmortales, Hiperión, 1983.
4 Aullón de Haro, Pedro, El jaiku en España, Hiperión, 1985.
5 Basho, Matsuo, Sendas de Oku, la Universidad Autónoma de México, 1957.
6 Cisneros Cox, Alfonso, La ensenada, Ediciones Caracol, 2007.
7 井尻香代子，『アルゼンチンに渡った俳句』，丸善出版，2019，pp. 207-237.
8 Asociación de la Gente del Haiku en Albacete, Senderos. Edición I y II del Concurso Internacional de Haibun "Albacete, Ciudad de la Cuchillería", MCA, 2019.
9 加藤楸邨，大谷篤蔵，井本農一監修，『俳文学大辞典』，角川学芸出版，2008.
10 同書，p.714.
11 同書，p.992.
12 同書，p.478.
13 同書，pp.727-728.
14 同書，p.675.
15 同書，p.665.
16 木藤才蔵・井本農一校注，『連歌論集　俳論集』（日本古典文学大系 66），岩波書店，1967，p.319.
17 加藤楸邨，大谷篤蔵，井本農一監修，『俳文学大辞典』，角川学芸出版，2008．pp.666-667.
18 Sancho Chicote, Javier, Flores de almendro, Hojas en la Acera, 2018, pp.18-19.
19 Rovila, Elías, Hojas en la Acera, Especial Renku"Viento de otoño", Nº 32 Año VIII Diciembre 2016, p.34.
20 Del Valle Tapia Perafrán, "Senryu", Haiku VI (Actas de VI Encuentro Internacional de Haiku 2010, Buenos Aires), Tozai Ediciones, 2012, p. 133.
21 Alcántara, Félix, Senderos, Ibidem, p. 7.
22 https://es.wikipedia.org/wiki/Haiga, 12 de marzo de 2021.
23 Yaura, Yukki, Haiga (Haikus ilustrados), Versión española de Teresa Herrero y Jesús Munárriz, Hiperión, 2000.
24 Es típica la definición de Blyth: El haiku es una especie de satori o iluminación, por lo que penetramos en la vida de las cosas. (prólogo de Reginald Horace Blyth, Haiku I, the Hokuseido Press, 1949).
25 ハイクの定義として，5・7・5 音節の定型と季語の使用を条件とするものである。しかし，スペイン語圏では韻律にある程度の自由を許し，季語も自然の要素で代替できるなど，緩やかな規範が適用されてきた。

The current state of Spanish Haikai literature

Kayoko IJIRI

Abstract

In recent years, not only haiku but also Haikai literature, which includes haiku, senryu, haibun, and haiga, have found acceptance in Spain and Latin America. This paper aimed to explore and elucidate why Japanese Haikai literature has come to be widely practiced among the general public in the Spanish-speaking world. This study comparatively analyzed the definitions of the Japanese and Spanish haikai styles, respectively, based on the actual production status of current Spanish-speaking haikai styles. Consequently, this study found commonalities in forms, themes, and styles of the two styles. While Spanish-speaking peoples have found various modes of expression, including traditional oral literature, to articulate sensibilities rooted in their lives, it seems that they are now seeking new poetics in the spirit and aesthetics of Japanese haikai.

Keywords : Spain and Latin America, acceptance of haiku, Haikai styles, definition, Spanish oral literature